

紳士スーツにおける縫目スリップについて

奈良佐珠女学院短大 ○山田洋子

奈良女大家政 丹羽雅子

目的 紳士スーツを着用する過程で生じる縫目スリップの評価法を決めるため、まず、着用時の縫目スリップの観測を行ない、その測定法を検討する。次いで、布の伸長特性、布の構造と縫目スリップとの関係を明らかにする。

方法 紳士スーツを対象に、着用時の縫目スリップの観測を行なった。観測部位は、上衣背縫目、前後袖つけヒ下衣ズボンの後股ぐりを選定した。その結果、後股ぐりは、たて糸方向を $\theta = 0^\circ$ として、約 20° 傾斜した方向の縫目、背縫目は 45° 、袖つけは、身頃側をたて糸方向として、前 20° 、後 60° 。日常の動作により、これらの部位に大きな縫目スリップを生じることがわかった。そこで、これら各部位での縫目と同じ角度の縫目を試料として採用した。また、予備試験として、紳士夏服、冬服の代表的組織である市販の平織、綾織 2 種を選んで、 $\theta = 0 \sim 180^\circ$ まで 15° 間隔の縫目にについて縫目スリップを計測し、前述の縫目角度と比較した。又、布の構造と縫目スリップとの関連を捉える為に、糸の太さ、糸上げ条件が同一で、織物構造を異にしたウールタッサー 12 種ヒトロビーカル 8 種を選定した。試験法は、JIS L 1096 縫目滑脱 B 法を採用し、試料布の力学的性質は、KES-FB 計測システムにより計測した。

結果 市販スーツ地については、それそれの縫目角度において、平織の方が綾織より大きな縫目スリップを示し、縫目を含む試料布の伸び特性と同一傾向を示すことがわかった。又、綾織については、綾の方向による差が顕著で、いずれも、縫目方向による縫目スリップの相違が定量的に捉えられた。織物構造の異なる試料によって、布の伸長特性、ならびに、構造要素と縫目スリップの関係を捉えることができた。